

P-187 妊娠早期に発症した純粋型妊娠中毒症胎盤の超微形態学的特徴について

国立大蔵病院, 神奈川県立厚木病院*
山田恭輔, 倉島富代, 田中忠夫, 堤 紀夫
大石基夫*, 伊藤治英

〔目的〕妊娠早期に発症する純粋型妊娠中毒症(早発純粋型)は比較的少ないとされているが,その児の発育は不良であり,母体の症状も重篤な例が多い。そこでこれらの胎盤について超微形態学的に観察し,その特徴を把握し,本態解明の一助とする。〔方法〕材料は早発純粋型16例の胎盤で,諸計測の後,1cm幅に薄切し,肉眼的に正常と認められる部位より光顕,透過型電顕用資料を型の如く作製した。〔成績〕早発純粋型例の胎盤は一般に小型で,厚さは薄く,母体面は狭く,その重量は290gから450gと軽量で,対照とした正常正期産例胎盤重量のM-1SDである460g以下であった。光顕的には部分的に絨毛間狭小と絨毛の密集化,絨毛接着,絨毛血管拡大,梗塞や壊死がみられ,全体的には線維素沈着とSyncytialknotの過形成が認められた。電顕的にはSyncytium細胞では微絨毛の変形,歪みに加え,母体血液成分の付着やこれに伴う局所壊死の像がみられ,またchromatinの凝集などの核の変化,粗面小胞体の拡大,小胞状構造の水腫化,更に高電子密度物質の沈着が出現していた。Langhans細胞は高頻度に観察され,核chromatinの凝集や核の変形,糸粒体の膨化,変性がみられた。絨毛上皮基底膜は全体に肥厚を呈し,絨毛間質では血管内皮細胞の変性や膠原線維の過剰出現がみられた。〔結論〕早発純粋型の胎盤絨毛には対照群の加齢に基く変化以上の変化が出現していた。とくにsyncytium細胞に病変を認め,なかでも表面微絨毛への母体血液成分の付着,浸入が注目され,子宮-胎盤血行障害に端を発した病態が妊娠早期より存在し,これにより局所壊死に始まる病変が胎盤発育障害へと進展することが特徴として認められた。

P-188 重症妊娠中毒症におけるNK細胞活性と血管内皮細胞ICAM-1発現の増強

日本医大
竹下俊行, 有坂康子, 大屋敦子, 梅沢勝弘,
朝倉啓文, 越野立夫, 荒木 勤

〔目的〕妊娠中毒症はその病態の中心が血管内皮細胞傷害にあるとされ様々な解析がなされるようになった。一方,妊娠中毒症を,母児の免疫不均衡状態と考えたとき,Natural Killer (NK)細胞の活性は病態を左右する要因の一つと推察される。そこで,妊娠中毒症病態形成に及ぼすNK細胞-血管内皮細胞の相互作用の影響を明らかにする目的で,妊娠中毒症重症妊婦を対象に末梢血のNK細胞活性を,また血管内皮細胞についてはNK細胞の標的分子の一つと考えられる接着分子,ICAM-1の発現状況を検討した。〔方法〕当科及び関連病院に入院した妊娠中毒症重症例18例を対象とした。対照群として,非妊婦(n=9),および外来通院中の合併症のない妊婦(n=9)を無作為に抽出した。NK細胞活性はK562細胞を標的細胞とした⁵¹Cr放出細胞傷害試験により測定した。患者血清のICAM-1発現に及ぼす影響は,血管内皮細胞培養系に患者血清を添加し,24時間培養後FITC標識抗ICAM-1抗体を加え,Flow Cytometryにより観察した。〔成績〕(1)高度の蛋白尿,IUGRを伴った妊娠中毒症重症群でNK細胞活性は有意に高値を示した($p<0.05$)。 (2)妊娠中毒症の発症時期が早いほどNK細胞活性は高かった。 (3)高度のIUGRを伴った妊娠中毒症患者血清は培養血管内皮細胞上のICAM-1発現を増強させた。〔結論〕IUGRを伴った妊娠中毒症重症例でNK細胞活性は有意に上昇する傾向を示した。NK細胞と血管内皮細胞との相互作用は血管内皮細胞上のICAM-1発現増強を介してより強くなり,IUGRを伴うような重症の妊娠中毒症へと導いている可能性が示唆された。